

令和2年度

研究紀要

19号

研 究 主 題

「聾学校における主体的な学びの実現に向けた授業実践」



鹿児島県立鹿児島聾学校

目 次

I	研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・	1P
II	幼稚部の研究・・・・・・・・・・・・・・	3P
III	小学部の研究・・・・・・・・・・・・・・	7P
IV	中学部の研究・・・・・・・・・・・・・・	11P
V	高等部の研究・・・・・・・・・・・・・・	15P
VI	寄宿舎の研究・・・・・・・・・・・・・・	19P

I 研究の概要

1 研究テーマ

聾学校における主体的な学びの実現に向けた授業実践

2 研究テーマ設定理由

近年、聾学校において幼児・児童・生徒数の減少だけでなく障害の重度・重複化，人工内耳の普及や補聴機器の発達による聞こえの実態の多様化，進路選択の多様化などの様々な状況が変化しており，それらに対応した一人一人への適切な指導や学力・コミュニケーション力の向上及び定着などが課題となっている。

令和4年度からはすべての学部で新学習指導要領が実施され，未来を生き抜くために必要な資質・能力として「知識・技能」の習得，未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」，学びを人生や社会で生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」の3つの柱や「主体的・対話的で深い学び」などが示され，より一層多様化した社会での生き抜く力の育成が求められている。

本校では，幼稚部から高等部専攻科までの幼児児童生徒が在籍しており「聴覚口話法を基盤に，個に応じたコミュニケーション手段を用いて，言語力，コミュニケーション能力，学力の向上を図り，「生きる力」を身に付けた，心豊かでたくましい人間を育成する」を学校教育目標とし，学校全体で一貫した教育活動を行っている。言語力・コミュニケーション能力はすべて学びの基盤となるものであり，新学習指導要領においても言語能力の確実の育成を求められている。このことから平成30年度から三年間の学校研究テーマを「聾学校における主体的な学びの実現に向けた授業実践」と設定し，聴覚に障害のある幼児児童生徒の言語力，コミュニケーション力等の言語能力を高めるための主体的な学びに必要な力とは何かを検討し，実践することが重要であると考えた。

3 研究目的

幼稚部・小学部・中学部・高等部・寄宿舎で一貫性のある学校づくりを目指すためにも研究テーマを一本化し，具体的な取組について，各学部で実践・検討を重ね，研究に取り組むようにした。各学部のテーマと研究の取組については以下のとおりである。

学部テーマ

幼稚部：自分で考え，伝える力を育む保育を目指して
小学部：自分で考え，表現できる力を育成する指導の工夫
中学部：言葉豊かな学びを支える指導の在り方について
高等部：言語活動を充実させるための指導の工夫
寄宿舎：社会で他者と豊かに関わる力を育てる

幼稚部については、集団遊びの時間における教師の役割に視点を当て、教師が環境を構成したり、遊びの中での教師の役割を理解して関わったりすることが、言葉の発達と定着を促し、子供が自分から伝える力の育成につながると考え、幼児が主体的に遊び、進んでことばを使って人と関わることができるようにするための、遊びの中での教師の役割と具体的な関わりを探っていく。

小学部については、様々な情報や意見を読み取るための言語力などを身に付けたり、自分の経験を的確に表現する語彙力を身に付けたりすることが必要であると考え、自分で考え、表現できる力の育成を目指した指導の工夫について LC スケール・LCSA スケールを活用した、実践・研究していく。

中学部については、『ことば』を読み書き能力としてだけでなく、思考の道具としての言語、学習の基盤としての言語という二つの側面を包括した意味でとらえ研究テーマを設定した。各教科の見方・考え方に基づく授業プランの作成や ICT 活用を行い、聴覚障害のある生徒の主体的・対話的で深い学びの実践について検討した。

高等部については、文章や相手の話の内容・意図を正しく読み取る力、日常生活及び社会で広く用いられている言葉を適切に理解する力、思考を整理し、正確・適切かつ論理的に根拠を示しながら過不足なく説明できる力が必要であると考え、平成 30 年度から研究に取り組んできた各教科・各学科の授業における「振り返りシート」等の活用を通して、言語活動を充実させる指導の工夫を行うことで、思考力・判断力・表現力の育成・伸長を促したり、社会生活に適應できる豊かな言語力・コミュニケーション力の育成を図ったりする。

寄宿舎については、社会で他者と豊かに関わるうえで、基本的なコミュニケーション力を身に付けることは不可欠であり、同時に他者の心情を思いやることや、マナーや礼儀を身に付けることが大切ではないかと考え、社会で他者と豊かに関わる力を育てる」のテーマの下、集団活動や体験的な活動を通して、様々な場面において他者と豊かに関わる社会性の育成を図っていくために必要な支援・指導のあり方について研究する。

4 研究内容・方法

3 年計画で各学部でテーマに基づいて研修を進める。

平成 30 年度	…理論研究	共通理解	実践	1 年次まとめ
			九聴研…分科会発表（外国語）	運営（センター的役割）
令和元年度	…実践	検証	2 年次まとめ	
			九聴研…分科会発表	
			（早期教育：幼稚部・学力と教科教育	小学部文系）
令和 2 年度	…実践	検証	研究のまとめ	
			来年度のテーマ研修の検討	
			< 11 月：全日本教育工学研究協議会鹿児島大会及び	
			県授業力向上プログラムに係る授業公開 >	

自分で考え、伝える力を育む保育を目指して

鹿児島聾学校 幼稚部

1 主題設定の理由

幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、教師は、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めることが求められている。本校では、「聴覚口話法を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション能力、学力の向上を図り、『生きる力』を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する」を学校目標として掲げている。

本校幼稚部の子供たちは人と関わることが好きで、それぞれのコミュニケーション手段で自分の思いを伝えてくる子が多い。しかし、語彙が少なく十分に伝えられなかったり、発信が一方的であったりする。また、教師に思いを伝えることはできても、子供同士でのやりとりは、曖昧なままに終わってしまうことも多い。そこで、トピックスでの話し合い活動や保育での子供たち自身が考える場面を設定したり、教師の働き掛け方を工夫したりすることで、子供たち自ら考え、伝える力を育んでいきたい。

また、遊ぶことが生活の中心となる幼児期において、主体的に遊ぶ経験をすることは、ことばの発達と人とのかわりを豊かにするために重要であり、主体的に遊ぶことで、活動の中で自然に意思を表出する必然性が生じる。そこで、教師が環境を構成したり、遊びの中での教師の役割を理解して関わったりすることで、言葉の発達と定着を促しつつ、子供が自分から伝える力の育成を目指したい。

2 研究目的

主体的に遊び、進んでことばを使って人と関わることができるようにするための、保育内容や環境構成の在り方、遊びの中での教師の役割と具体的な関わりを探る。

3 研究仮説

思考を促す保育内容や環境の工夫を行うことにより、子供たちが「自分で考え、伝える力」が育つのではないかと。

4 研究内容

(1) 1年目

ア 保育参観やビデオ分析等の保育研究を通して、思考を促す保育内容や環境設定、働き掛けなどを検討していく。

イ 年間指導計画等における各保育活動での配慮事項や保護者支援の内容について見直していく。

(2) 2, 3年目

ア 集団遊びの中で、教師と乳幼児それぞれの様子を記録し、分析する。

イ 幼児の実態と変容を見るための、指標となる段階表（※宮城県立聴覚支援学校の資料を参考にする）をもとに、幼児の主体的な姿を記録する。

ウ 遊びの中での教師の役割を検討し、客観視できる振り返りシートを作成する。

エ 作成したシートを活用して、教師の関わりを記録する。

オ 幼稚部3歳～5歳においては、木曜朝の「みんなであそぼう」の時間（週1回40分間の集団遊び）を検証時間とする。

カ 乳幼児0歳～2歳においては、集団保育の場面で検証する。

キ 毎回、記録をもとに教師の関わりと乳幼児の様子に視点を当てて活動を振り返り、次時に生かす。

ク 実践の結果を評価する。

ケ 遊びの中における教師の役割について考察し、まとめる。

5 研究の実際

(1) 1年目の取組

「思考を促す取組」の指導方法について共通理解を図り、学期ごとにお互いの保育について情報交換を行うことで、保育力の向上に取り組んだ。

ア 保育での働き掛けに関する情報交換

教師同士で保育活動における働き掛けについて知るために、トピックスと設定保育の場面について、「内容」、「教師の働き掛け」、「子供の反応」について各自で1週間の記録を取った。

それをもとに子供の様子や状況に応じた働き掛けに関して話し合った。保育の中で、子供たちが考えられるように、「どうなるか」、「次は何か」など子供に予想させたり、これまでの経験を思い起こさせる投げ掛けをしたり、「Aかな、Bかな」と例を示してイメージをもたせたりするなど、実態に応じた働き掛けを工夫した。

イ ビデオ研修

思考を促す働き掛けとして「考える場を準備する」、「手段や方法を思いつく」、「自分の言葉で伝える機会を作る」、「話し合いを活性化する」といった項目を挙げ、年齢ごとの保育場面4事例を取り上げ、保育の映像を見ながら、教師の働き掛けの意図や子供とのやり取りについて話し合った。

場面における教師の働き掛けの意図について「場面設定が適切か」、「話の流れはどうか」、「誘い方、投げ掛け方について」、「押さえない言葉をどう取り入れるか」、「話の内容を全員が共有する手立て」、「話題や話者への注意の向け方」、「経験の有無への対応」など、理解力やコミュニケーション手段など実態の違いに対する教師の働き掛けが話題となった。子供たちに視覚情報を用いて話題の共有を図ったり、どこか一場面でも全員が共有できるように工夫したり、発信の少ない子供については、一回の発信も逃さないように気を配ったりするなど、教師の状況に応じた具体的な働き掛けが提案された。

ウ PDCAサイクルの活用

教師一人一人が自分の保育実践を振り返る方法として、PDCAサイクルを取り入れた。実際に記録を取ってみて、それぞれが気付いたことなどを話し合った。

一定期間、記録を取りながら保育を行ったことで、前の保育の振り返りを生かし、「子供が考える場面をいつ、どのように取り入れるか」、

「教師がどのように働き掛けるか」といった保育の内容や働き掛けのポイント、毎日の保育のつながりなどを意識することができたという意見が多かった。しかし、記録を残すのは大事だが負担感がある、集団が変わった場合にどうするかなど、記録の期間、書き方、作業量などについては工夫や改善をする必要があることが明らかになった。

(2) 1年目の成果と課題

ア 成果

- ・ 教師相互の保育実践をきくことで、具体的な働き掛け方を知ることができた。
- ・ 記録を取ったことで、子供の成長と次の課題が分かりやすくなった。
- ・ 保育の中でねらいを絞ったことで、発音や構文の指導に重点を置く、あるいは友達同士の伝え合いに力を入れるなどと、じっくり関わることもできた。
- ・ 一つ一つの言葉掛けに気を付けたり、働き掛けた後の子供の反応をより注意深く見るようになった。
- ・ 間の取り方や介入の仕方を工夫したことで、子供同士での伝え合いが増えてきた。

イ 課題

- ・ 答えがすぐに出せる発問等が多くなってしまうので、「思考力」という点で発問の仕方や教材の工夫をしていく必要がある。
- ・ 実態差がある集団での子供たちへの働き掛けがまだ充分でない。
- ・ 話している内容や言葉の意味をどれだけ理解できているか、文字や絵など視覚的アプローチなどで確認し、子供たちが話題を共有できるように努める必要がある。
- ・ 優しさや思いやりなど、目に見えない物や心に関する事柄の伝え方が難しい。経験や体験の中で育てたり、知ったことを記憶にとどめたりしていく必要がある。家庭にも働き掛けて行く必要性を感じる。
- ・ 記録を取る際には、記録の期間や書き方、作業量を工夫する必要がある。

ア 段階表作成

イ 乳幼児の変容

表1 鬼遊び「主体的に関わる・伝える」

	前段階	I 段階	II 段階	III 段階
A児(年少)		②③		
B児(年少)		①②		
C児(年中)			① →	③
D児(年中)			①③	
E児(年長)		① →		③

ア 成果

- ## イ 課題

- (5) 3年目の取組

2年目の研修の乳幼児の「主体的に遊ぶ」ことに関する段階表に加えて、3年目はさらに、教師の関わりについて、遊びに対するアプローチと言語や思考の発達へのアプローチの二つの視点から教師の役割を客観視できる評価表を作成し、遊びを振り返る際の評価基準表にまとめた。

アの評価シートに対応した記入用の振り返りシートを作成した。子どもたちの遊びについては、様子や遊びの変容を記入し、段階表を参考にして評価した。教師の関わりについては評価基準を参考にして役割や援助の実践度を自己評価したり、具体的な実践や次回に向けての項目等について記入したりした。

表2 振り返しシート

ア) 口に記帳用		
()	： 容入頁第 \ 日 月 : (日) 年 期の日合	
() 券納額 (ふくふふふふふふふ)	() 券納額 (ふくふふふふふふふ)	
ア) 口に記帳用		
() 車本の償却する買ひ新築の意思(附票①)	() 融合(債券)の轉讓①	
() 貸付期間の終止の轉讓 買取実況 車本の償却 ① 0-1-5-E ② 0-1-5-E ③ 0-1-5-E ④ 0-1-5-E ⑤ 0-1-5-E ⑥ 0-1-5-E	() 貸付期間の終止の轉讓 買取実況 ① 0-1-5-E ② 0-1-5-E ③ 0-1-5-E ④ 0-1-5-E ⑤ 0-1-5-E ⑥ 0-1-5-E	() 債券のてのての書留 ① 0-1-5-E ② 0-1-5-E ③ 0-1-5-E ④ 0-1-5-E ⑤ 0-1-5-E ⑥ 0-1-5-E
() (さへ点納) () 車本の償却①		() (さへ点納) () 債券のてのての書留①

年少児担任は誘導、教導の実施度が高く、年長児担任は見守り、足場かけ、省察促しの実施度が高かった。これは、教師が年少児に対して

は関わり方や解決策を与えるが、しだいに子どもの主体性を重視した関わりに移行していくためである。「教師の役割分担」については、ほとんどの項目で実施度の変化が見られた。「主体的に遊ぶ」、「主体的に関わる・伝える」について、ほとんどの子どもが遊びを通して段階が上がり、教師の関わりも変化した。

表3 鬼遊び「主体的に関わる・伝える」

	前段階	I 段階	II 段階	III 段階
A児(年少)		①→	③	
B児(年少)		①→	③	
C児(年中)			①→	③
D児(年中)		①→	③	
E児(年長)			①→	③

乳幼児教育相談では、「教師の役割分類」については、チーフとサブで具体的な関わりが異なるため、役割分類の実践度にばらつきが生じている。「論理的思考の発達に資する援助の水準」については親子活動が主となるため全体的に「見守り」や「誘導」の実践度が高い。対象児の思考レベルを探りながら毎回の環境設定や課題設定、手立て等を講じ、意図的に思考を揺さぶるような場面設定を行った。教師が自身の役割や、思考を促す関わり方を意識したことで、対象児の他者に対する関心の広がりや、やりとりしようとする様子、思考する姿、依頼や要求の表出等を引き出すことができた。

(6) 3年目の成果と課題

ア 成果

- ・ 振り返りシートの記入欄をチーフとサブに分けて記入するように改善したことでチーフとサブそれぞれの観点で評価することができ、役割分担やねらいの整理ができた。
- ・ 振り返りシートが分かりやすく、「教師の役割分類」「論理的思考の発達に資する援助の水準」があることによって子供の変容が分かりやすくなり、自分たちでの役割についても明確にすることができた。
- ・ 毎週全職員でPDCAサイクルを繰り返すことで子供たちが日々成長する姿を確認するこ

とができた。さらに、「みんなで遊ぼう」以外の場面でもシートを活用することができた。

イ 課題

- ・ 子どもの変化は客観視できるが、同じ遊びでも状況や遊びの種類によって教師の関わりは変化するので、教師の関わり方を継続的な変化として数値化して評価するのは難しかった。
- ・ 乳幼児教育相談と3歳～5歳幼児において、評価基準表の共有はできたが、研修内容を共有し検証することができなかった。接続をスムーズにしていくためにも、共有する時間を設定したい。

6 研究のまとめ

子どもたちが自分で考え、伝える力を育てることをテーマに研究を進めてきた。研究当初は、思考を促す保育の在り方として、保育参観やビデオ分析等を通して具体的な場面での教師の働き掛けや話し合い活動の展開について学び合うことができた。

今年度は、遊びを通して、教師が意図をもって環境構成をしたり、教師自身も環境の一部としてその役割を理解し、意識して関わったりすることで、子どもたちの遊びや子ども同士の関わり、伝え合う様子に変化が見られた。更には、実践を重ねる際に振り返りシート等を使ってPDCAサイクルを有効に活用することができた。

子どもたちが自分で考え、その思いや考えを伝えることができるようになることは研究のテーマにかかわらず、私たちがめざす子どもの姿である。3年間の研究の成果を教師の指導力として蓄積し、今後も継続して取り組んでいきたい。

7 引用・参考文献

- ・ 筑波大学附属聴覚特別支援学校 (2018) 季刊聴覚障害 ジアース教育新社
- ・ 鹿児島大学教育学部附属幼稚園 (2018) 遊びの中で育まれる子どもの学び
- ・ 佐藤有香 (2017) 「人的環境としての保育者の役割 ―現職保育者自身の視点で―」
- ・ 内田伸子 津金美智子 (2014) 「乳幼児の論理的思考力の発達に資する援助の水準」保育科学研究

自分で考え、表現できる力の育成を目指した指導の工夫 ～LCスケール・LCSAスケールを活用して～

鹿児島聾学校 小学部

1 主題設定の理由

本校小学部ではこれまで、語彙力や表現力を高める取組として教科指導の他に日記指導や学習した言葉等の掲示の工夫、ICTを活用した言語指導など学校校生活全般を通して様々な活動を実施してきた。しかし、授業や日常生活での様子では、自分の意見や感想、出来事を的確にまとめることができず苦しさがある児童や、場面に合う適切な表現や語彙が分からないために意見を分かりやすく伝えられない児童、教師から言い直しを指導される児童などが多く見られる。

新学習指導要領において「語彙は、全ての教科における資質・能力の育成や、学習基盤となるものである」と位置付けられ、言語が学習活動を支える重要な役割を果たすものとされ、より一層各教科で言語活動を充実することが求められている。

このことから、様々な情報や意見を読み取るための言語力等を身に付けたり、自分の経験を的確に表現する語彙力を身に付けたりすることが必要であると考え、小学部では、「自分で考え、表現できる力の育成を目指した指導の工夫」に焦点をあて、実践した。

2 研究目的

児童の主体的に学ぶ意欲を高める教材や課題設定、互いに伝え合うための指導方法（言語力や手話表現等も含む多様なコミュニケーション手段）を工夫することで、児童が自ら主体的に考え、表現する力の育成を図る。

3 研究仮説

聴覚障害児に対して言語・コミュニケーション発達スケールである LCSA スケール・LC スケールの検査結果を踏まえ、言語力・表現力を高めるための児童が主体的に学ぶ教材や課題設定、互いに伝え合うための指導方法（言語力、手話等も含めて）の工夫を行うことにより、児童が自ら考え、表現する力を育成することができるのではないか。

4 研究内容

LCSA スケール・LC スケールはことばの理解や使用に難しさのある児童の言語・コミュニケーション発達について調べる標準化された検査である。聴覚に障害があり、言葉の獲得に苦しさのある児童にとっても、この検査を実施することで、個々の児童の言語・コミュニケーション発達の段階が明らかになるだけでなく、聴覚に障害がある児童の共通した言語面の課題や困難さも把握することができると考え、検査を実施することにした。

そして、これらの検査結果から、言語・コミュニケーション面での課題を解決するための学習活動を実施し、児童の言語コミュニケーション発達に対する効果的な指導方法を実践・検証し、LCSA スケール・LC スケールの結果の変容を調べ、指導の効果を明らかにする。

5 研究の実際

準ずる教育を行う学級と重複障害学級の2グループに分類し、実践に取り組んだ。

(1) 昨年度までの取組の成果と課題

ア 言葉の宝箱

教科書の巻末資料を活用して、「人物」、「事物」、「考え」、「心情」の4カテゴリーで語彙力を高めた。

言葉の宝箱								心情を表す言葉
痛快	我を忘れる	圧倒される	心にひびく	かみめいを受ける	いとし	好感をもつ	あこがれる	
気が気でない	気がかり	心もとない	そわそわする	くすくすいたい	かたの荷が下りる	解放感	気が楽になる	
味気ない	後悔	心残り	なごりおし	ためらう	くらくく	鼻につく	むっとする	

イ 一日一語

「語彙知識」と相手に適切に言葉で説明し伝える「文表現」の力を身に付けるため、一日に一語のテーマで短文づくりを実践した。

ウ 表現の時間

週1回の朝15分間で、一つのテーマを設定し、児童同士で発表し合うようにした。

エ ことばんく

各教室に掲示スペースを設け、学習した重要語句などをカード化することで、日常場面における語彙の拡充に努めた。



写真1 ことばんく

(1) 準ずる教育を行う学級の実践について

平成30年度のLCSAスケールの検査結果を受け、児童の言語力、表現力を高めるために、今年度は以下の工夫による実践を行った。

ア 国語「言葉の宝箱」の授業活用

今年度は「言葉の宝箱」一覧を授業での重点活用に取り組んだ。

5年生国語では、物語文で主人公にふさわしい「人物を表す言葉」を選び、その理由を「考え方を表す言葉」等を使って説明したりする場面を設定したり、作文を書く活動では「心情を表す言葉」を活用して作文の自分の気持ちの表現を推敲したりするなど様々な場面を設定したりした。

また、2年生では、生活科の観察文を書く活動で「ようすをあらわすことば」を使って表現したり、日記で「きもちをあらわすことば」を活用したりする場面を設定した。

イ 「一日一語」の作成

日記と同じように宿題として各自で取り組むようにした。初めは言葉の意味を捉えきれず、

間違った使い方をしていた言葉でも繰り返し短文を作ったり、友達の作った文を読んだりすることで、意味を正しく捉えて文章の中で活用することができるようになった。

「一日一語」は毎日一つの言葉を取り出して各自で取り組むので、教師や児童の負担にならずに継続することができた。

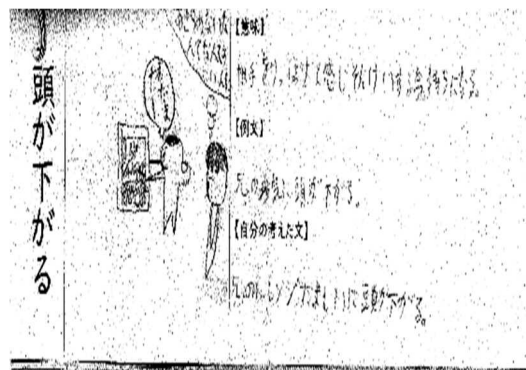


写真2 一日一語の取組

ウ 「表現の時間」の実施

各月や学期ごとに各学級で「言葉の宝箱」と関連させたテーマを決め、取り組んだ。イラストに合う言葉を選んで文章を作る活動や文章を分かりやすい表現に推敲する活動などを通して、委員会活動やお礼の手紙を書く活動などを通して、相手に伝わりやすい表現かどうかを考えることができるようになってきた。また、行事の感想を書く作文等でも表現の時間や一日一語で学習した言葉や文表現を活用して書くことができた。

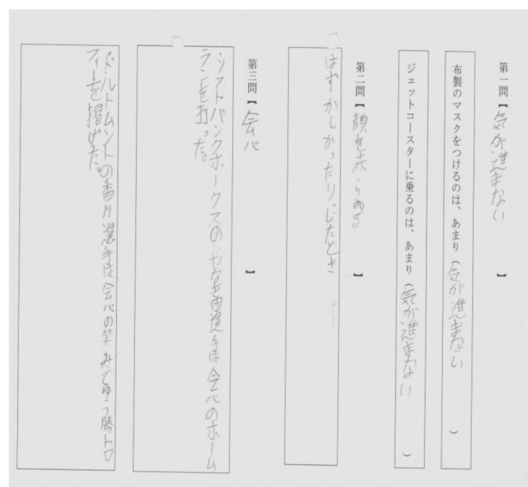


写真3 表現の時間

(2) 重複障害学級での取組について

今年度は、5年生に絞り、日記指導や体験活動の事前・事後指導を検討して、平成30年度からの変容を調べた。

ア 日記指導や体験活動の事前・事後指導と日記の変容について

連絡帳では日々の学習で取り扱った言葉や意味、使い方等を毎日書いて家庭に持ち帰るようにした。家庭では、その日の出来事や学習について、連絡帳に記した言葉を使って、保護者等とやり取りしたり、言葉を再度確認した上で日記を書いたりした。その結果、経験やその時々状況を、意味を理解して使える言葉を活用し表現する様子が見られた。

自分が伝えたいことを伝えられる言葉が増えたことが、「もっと相手に分かるように表現したい、もっと言葉を覚えたい」という意欲につながった児童もいた。

また、6月当初と比較すると、文章が整理され、学習した『つなぎ言葉』を使用して、状況や自分の気持ちが分かるように表現することができた。日記に書かれてあることについて毎日教師とやり取りし、助詞や動詞の使い方、接続詞を使った簡単な因果関係の表現の方法などを日々具体的に指導した積み重ねが成果として表れた。(写真4、5)

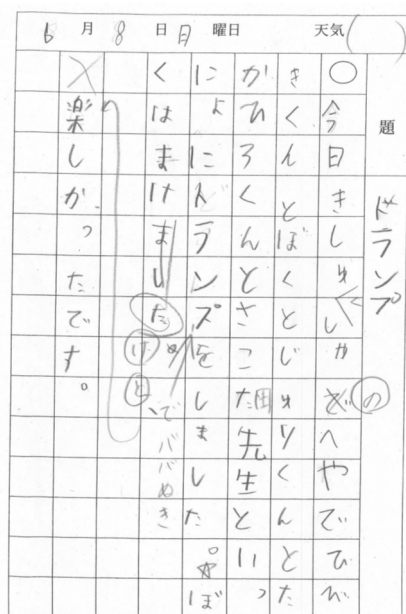


写真4 6月の日記



写真5 1月の日記

イ 連絡帳等で使用した「しおり」の活用

連絡帳や事前学習で使用した「しおり」を活用し、家庭と連携して、『きょうりよく』、『朝食』、『まき』、調理学習に関する言葉等、宿泊学習に関連する言葉を覚えられるようにした。日々の日記や宿泊学習後の振り返りでは、体験を通して、それらの言葉の意味がつながり、自分から文章で使って表現することができた。(写真6)

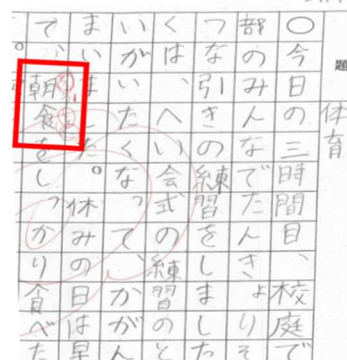
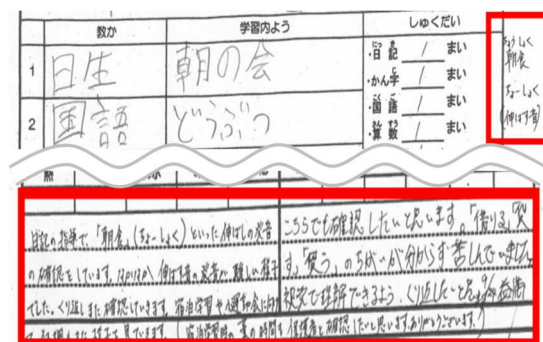
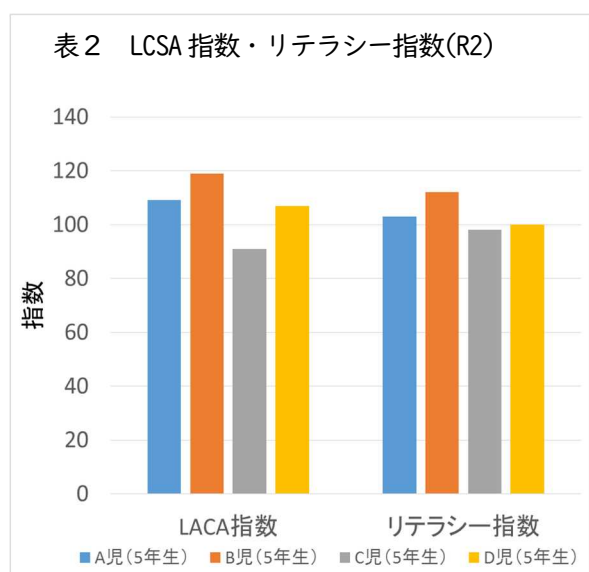
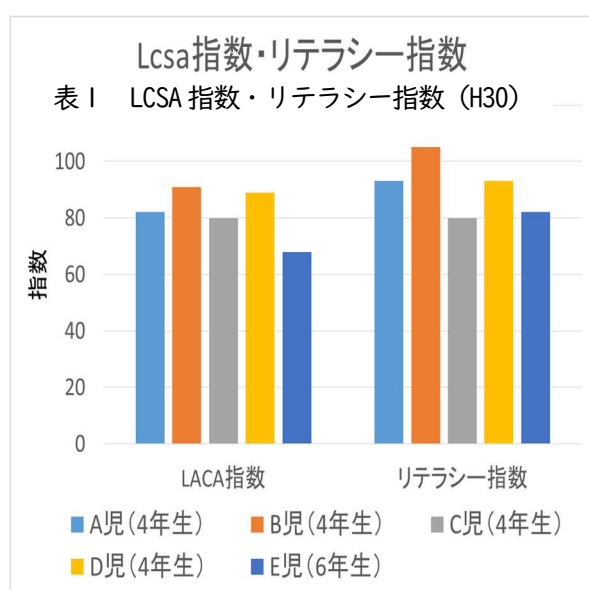


写真6 『朝食』等の言葉について確認し、活用

6 研究の成果

平成 30 年度と今年度に実施した、LCSA スケールの検査結果を比較した。平成 30 年度は、全児童平均が LCSA 指数 82、リテラシー指数 90.5 と年齢平均より低い指数だった(表 1)。また、各下位検査では、平均値が低い課題として、「文表現」、「柔軟性」、「語彙知識」が挙げられた。

一方、令和 2 年度の全児童プロフィールの結果では平均が LCSA 指数 106. 5、リテラシー指数が 103. 25 となり、年齢平均より高い指数となった(表 2)。また、各下位検査については、平成 30 年度に平均値が低い課題として挙げられた「文表現」、「柔軟性」、「語彙知識」が年齢平均よりも高い指数となった。



これまでの児童の課題として、語彙の意味だけでなく、語彙を使い適切に表現する力やそれらを使って、分かりやすく伝えることができる表現力を高める必要があると考え、「言葉の宝箱」一覧の作成をはじめとする上記の取組を行った結果、これらの指導は児童に言語力や表現力を育成する効果があった。

(1) 成果

ア LC スケール・LCSA スケールを活用することで児童の言語面やコミュニケーション面の課題が明確になり、教師も児童の課題を意識して学習指導につなげることができた。

イ 児童が書く活動を多く取り入れることで、準ずる教育を行う学級・重複障害学級共に文章を書くことへの抵抗が減り、言語力・表現力が着実に身に付いた。作文や日記等の書く活動だけでなく、発表場面でも相手に詳しく表現することができるようになった。

ウ ICT(書画カメラや見える校内放送等)と組み合わせることで友達の文章を読んで理解したり、自分の文章と比較したり、間違いに気づき合ったりと伝わりやすい文章を考える機会が増え、児童の文章への興味・関心が高まった。

(2) 課題

ア 言語・コミュニケーションの課題の課題には効果的な指導に取り組むことができた一方、聴覚障害児に多い助詞の間違い等については十分な指導につなげることができなかった。助詞等の指導についても併せて指導が必要である。

イ 言語力・表現力を高めるためには授業だけでなく、日記や朝の時間など様々な場面での指導が必要であった。今後は GIGA スクール等を活用し、授業で効率よく言語指導が行える活動を検討する必要がある。

『ことば』豊かな学びを支える指導の工夫
～聾学校における主体的・対話的で深い学びを実現する授業実践～

鹿児島聾学校 中学部

1 主題設定の理由

本校中学部では、これまでに言語獲得に困難を示す聴覚障害の特性を踏まえ、国語力を高めるための取組（平成 24 年～26 年度の研究）、授業における基本的指導技術（平成 27 年～29 年度）について、授業実践をもとに研究を進め、平成 30 年度からは、思考の道具としての言語、学習の対象としての言語といった、言語のもつ多面性を踏まえ、『ことば』豊かな学びを支える指導の工夫」を研究テーマに据え、授業実践を重ねてきた。

新学習指導要領における資質・能力を、聴覚障害のある本校生徒に育むための「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、どのような授業実践が有効か検証すべく、本研究主題を設定した。

2 研究目的

聴覚障害のある生徒が、主体的・対話的で深い学びを実現するためには、どのような授業実践が有効であるか明らかにする。

3 研究仮説

教科の見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連づけたり、物事を深く考察したりする学習活動の充実が主体的・対話的で深い学びの実現に有効である。その際に、言語獲得、情報獲得に困難を示す聴覚障害の障害特性に考慮し、思考過程の視覚化や ICT の活用が有効なのではないか。

4 研究内容

- (1) 生徒の言語力の詳細な実態把握を実施する。(H30)
- (2) 聴覚障害の特性を踏まえ、各教科の見方・考え方をもとにした授業プランの作成及び検討を行う。(R1)
- (3) 授業実践を通して仮説検証を行うと共に ICT 機器の活用方法も探る。(R2)

5 研究の実際

(1) 生徒の言語面での実態把握

中学部生徒 3 人の言語面について、教研式「読書力検査 (Reading Test)」と記憶順序課題、絵・形・色記憶順序課題の三つの課題を用いて実態把握を行った。

表1 読書力検査 (Reading Test)

生徒	1	2	3	平均
読字力	58	77	81	72.0
語彙力	66	66	68	66.7
文法力	95	68	95	86.0
読解力・鑑賞力	76	48	90	71.3
平均	59.2	52.2	67.4	59.6

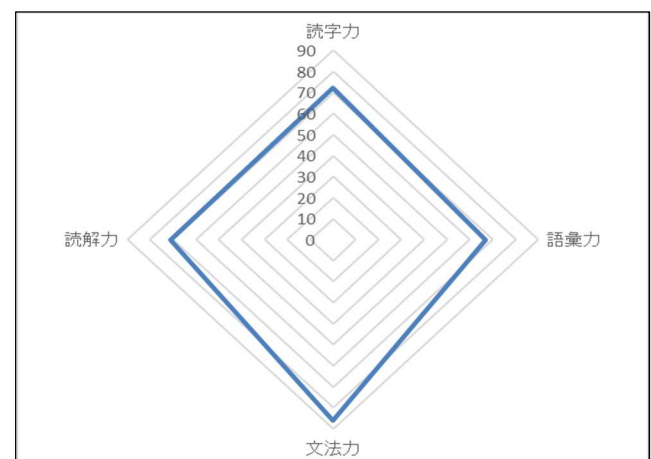


図1 Reading Test

読書力検査 (Reading Test) は読字力（基本的な語のうち、特に重要なもの、誤りやすいもので構成され、読解・鑑賞への機能的なはたらきをみる）、語彙力（読解・鑑賞の基礎となるのに必要な語彙の理解力をみる）、文法力（読解・鑑賞において重要な役割を果たす文の構成や文章の構成に関する能力をみる）、読解力（順序や場面の様子、段落相互の関係の読み取り、内容や要旨の把握といった読解の力や、登場人物の気持ちを考えたりするなどの鑑賞の力をみる）の四つの下位検査を

様式2は、様式1で整理した内容を踏まえ、1単位時間の授業を構想していくシートである。授業の目標を三つの柱で整理し、その授業で用いる、教科の見方・考え方を明記した。また、その授業での学習上の困難さを考え、それを様式3の手立てに反映した。

授業プランを立ててみましょう。

単元・題材
Lesson 5 "Universal Design"

本時の目標

【知識・技能】 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

【思考力・判断力・表現力】 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

【学びに向かう力・人間性等】 相手に分かりやすく授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

見方・考え方

入し上の先生に授業計画を紹介するという場面を設定し、相手に分かりやすく授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

本時の目標を達成するために有効とされる学習活動

○ 授業計画の基本的な考え方を身につけることができる。

○ 言語活動

それらが考えた英文を発表し合うことで、他の英文を読み取り、聞き取りし、さまざまな表現を習得することができる。

本時を学ぶ上で予想される生徒の実態

生徒の実態

○ 授業計画の形・考え方が身に付いていない。

○ 一文の中に主語・動詞が2つあることで理解が難しい。

必要な支援及び配慮事項

○ 2つの文を1つにするというイメージしやすいような書き方を示す。

図4 様式2

授業プラン

本時の目標

1. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

2. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

3. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

4. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

5. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

6. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

7. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

8. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

9. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

10. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

11. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

12. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

13. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

14. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

15. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

16. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

17. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

18. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

19. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

20. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

21. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

22. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

23. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

24. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

25. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

26. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

27. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

28. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

29. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

30. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

31. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

32. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

33. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

34. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

35. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

36. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

37. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

38. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

39. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

40. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

41. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

42. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

43. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

44. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

45. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

46. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

47. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

48. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

49. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

50. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

51. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

52. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

53. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

54. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

55. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

56. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

57. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

58. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

59. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

60. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

61. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

62. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

63. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

64. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

65. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

66. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

67. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

68. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

69. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

70. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

71. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

72. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

73. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

74. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

75. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

76. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

77. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

78. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

79. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

80. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

81. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

82. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

83. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

84. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

85. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

86. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

87. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

88. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

89. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

90. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

91. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

92. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

93. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

94. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

95. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

96. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

97. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

98. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

99. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

100. 授業計画の形・意味・用途に関する知識を身につけることができる。

図5 様式3

(3) 授業での指導研究・実践及び改善と評価1

ア 授業実践1：理科

化学分野の「原子・分子」において、化学変化を質的・実体的に捉えること（見方）、化学反応前後での時間的な比較（考え方）を学習活動の中心に据えて授業を行った。授業計画を立てる際に、教科の見方・考え方を意識することで、

指導目標が明確になることと、生徒の理解の深まりが見られるようになった。

イ 授業実践2：国語

古典「敦盛の最期」について、歴史的仮名遣いの法則を踏まえて現代語訳を示し、古語と現代語訳の両面からの読み取りをした。これを踏まえて身分差や動作主、話者を明確にすることで、登場人物の心情を推し量る際の有効な手立てとなった。

生徒が学習したことを文章やモデルを用いて表現することにより、思考の視覚化が有効となる。このことでより深い学ぶことにつながる事が分かった。

各教科の特質に応じた「見方・考え方」とは、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方のことである。つまり、「見方・考え方」は、学びの深まりの「鍵」となるものである。この「見方・考え方」は、新学習指導要領における「資質・能力」と相互関係にあることから、次年度以降の研究で検討した。

各教科の見方・考え方をもとにした授業プランの作成により、1単位時間内でのねらいと、聴覚障害特性から考えられる学習上の困難を明確にすることで、必要な手立てが明確になった。その一方で、抽象的な概念を伴う学習用語の習得に時間を要する生徒の実態から、学習用語のイメージ化と定着のための指導については、思考の視覚化をする上でモデルや表現活動を行うことが有効であることが明らかになった。中学校の学習内容は抽象的な概念が多くなることや、学習用語の増加することにより、聴覚障害のある生徒にとっては、語の習得が難しくなる。そこで、ICT機器を活用し、一つ一つの語句の意味を図や写真からイメージしやすくしたり、考えを図示したりして語の習得する指導の検討を行うこととした。

(4) 授業での指導研究・実践及び改善と評価2

今年度は、授業力向上プログラム及び全日本教育工学・鹿児島大会での公開により、中学部からは外国語科の授業について実践と研究協議を

行った。前項で浮かび上がった課題から、ICTを活用した授業実践について検討を行った。

外国語科における見方・考え方、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。」を授業プランにおいて確認した上で、世界平和に貢献したノーベル平和賞受賞者の中から、アウンサンスーチー氏の半生に焦点をあてた英文について学習した。

事前の授業では基本となる英文法を押さえた上で、アウンサンスーチー氏の演説やニュース等の読解に取り組んだ。公開授業においては、タブレットやコンピュータ等のICT機器を活用し、英文を入力したり、発表したりして、自分の考えを友達と共有する活動を取り入れた。疑問に思ったことは、インターネット等で調べ、英語表現の幅を広げられるように工夫した。お互いの入力した英文はテレビモニターに表示されるので、生徒同士で意見を共有できることや、英文を視覚化することで聴覚害による学習上の困難さが軽減するというメリットが生じた。

社会科では、電子黒板を主に活用して授業を行っている。聴覚障害により学習用語の獲得に時間を要することも多いが、電子黒板で写真や地図などを効果的に映すことで、生徒が学習用語について視覚的なイメージを持つことができるので、より深い学びが可能となる。

保健体育の時間はタブレット端末を使用し、競技中の生徒の様子をビデオで記録し、その後の振り返り等に活用している。ビデオを通じて自分や他の生徒のフォームを視覚的に捉えることができるので、有効な手立てとなっている。

ICT活用は、写真や動画を投影できるので、生徒が同じ画面を見ながら意見を交換したり、情報を得たりすることに有効な手立てである。タブレット端末やコンピュータ等の情報機器を活用することで、生徒一人一人の情報活用能力の育成にもつながった。

三か年で以下のような成果と課題が明らかになった。

(1) 研究の成果

- 生徒の記憶方略は、音声方略であること。
覚えるべき学習用語は、くり返し反復することで記憶の定着が図られる。ただし、生徒の実態によっては、指文字や手話による記憶方略をとることで、より記憶する力が高まることが考えられる。
- 学年相当の言語力が身に付きつつある。
国語科の指導を中心とし、幼稚部、小学部からの系統的な言語指導により、生徒の言語に関する力は学年相当の力が身に付いていると評価できた。
- 各教科の見方・考え方に基づく授業実践
新学習指導要領における三つの柱を支える鍵となる、各教科の見方・考え方を授業づくりに取り入れることで、授業のねらいが明確になった。
- ICT機器の活用により、学習用語の定着が図られた。抽象的な内容を含む学習用語の理解には、ICT機器を活用することで、語句のイメージ化が容易になり、その結果、学習用語の定着が図られた。
- 話し合いや意見を共有する活動により、自分の意見について根拠を示して発表したり、自分の考えを説明したりすることで、より深く考えることができるようになった。

(2) 今後の課題

- 教科横断的な言語指導の充実
中学部以降、教科担任制となるので、言語指導にも一貫した指導方法の検討が必要である。
- 社会に役立つ言葉の獲得
新型コロナウイルス感染症に関しては「パンデミック」、「ロックダウン」等のこれまで聞き慣れない言葉が多く報道された。そのような時事に関する語句に対する習得及び興味・関心が低い様子が見られた。このような社会で取り上げられる時事を扱うことで、新聞やニュースを通じた語彙の獲得の機会を設定することが必要であると考えられる。

6 研究のまとめ（成果と課題）

言語活動を充実させるための指導の工夫

鹿児島聾学校 高等部

1 主題設定の理由

- (1) 本校高等部生徒にとって、思考力・判断力・表現力の伸長は進路実現や社会生活を行う上で、最も重要な課題である。
- (2) 思考力・判断力・表現力の育成には、基礎的・基本的な知識・技能の習得、且つ、言語活動の充実が有効な研究課題である。
- (3) 言語活動の充実を目指す本研究は、新学習指導要領における基礎的・基本的な知識・技能の習得・活用はもとより、問題発見・解決能力向上に向けた、足がかりの研究とすることができる。

2 研究目的

言語活動を充実させる指導の工夫を行うことで、思考力・判断力・表現力の育成・伸長を促し、将来の生き方を考え、適切に進路選択や進路実現、社会生活における自己実現を可能とし、また、社会生活に適應できる豊かな言語力・コミュニケーション力の育成を図る。

3 研究仮説

本校高等部では、身に付けさせたい思考力・判断力・表現力について検討を行い、文章や相手の話の内容・意図を正しく読み取る力、日常生活及び社会で広く用いられている言葉を適切に理解する力、思考を整理し、正確・適切かつ論理的に根拠を示しながら過不足なく説明できる力が必要であると考えた。これを受け、各教科等における言語活動から効果的なものを抽出し、学部全体で実践することが思考力・判断力・表現力のさらなる育成につながるのではないかと。

4 研究内容

- (1) 本校高等部各教科の言語活動の取組を集約し、効果的なものを抽出する。(H30)
- (2) 各教科で言語活動において身に付けさせたい思考力・判断力・表現力を検討する。(H30)

- (3) 1年目の研究を基に、研究内容を具体的に精査し、更なる授業改善を図る。(R1)
- (4) 1年目で検討した振り返り活動を実践・検証する。(R1)
- (5) 研究成果について検証し、研究のまとめを行う。(R2)

5 研究の実際

(1) 平成30年度の取組

ア 各教科等の言語活動の取組集約

(ア) 各教科の実践

〈国語〉

南日本新聞の「南風録」を掲載し、3年生の授業で週に一度比較的読みやすい記事を抽出し、漢字の読みの確認、要約、感想の記入を行った。

〈数学〉

分かっていること・求めていることを明確にできるようにした。

定型の解答を示し、定型に従って解答する練習を行った。

答案を共有し、説明の過不足を考え、簡潔な解答を目指して話し合うようにした。

〈英語〉

自分自身の考えや経験に基づいて記述しなければならない質問を準備し、リフレクションシート（振り返りシート）を活用した。

〈社会・ファッション造形基礎・理容実習等〉

語句説明や課題解説を生徒自ら行うようにすることで、生徒の言語活動に関する思考場面をできるだけ多く設定した。

〈物理基礎〉

生徒にそれぞれ異なる問題を課し、その解説を生徒が行うようにした。教師は解説せず、発表者には、相手に分かりやすい説明を工夫するように支援し、発表後は質問時間を設けた。

〈保健体育〉

チーム目標を板書して全体で共有し、キャプテンを中心に目標に則した練習内容を検討した。

〈保健体育〉

前時の反省・本時の目標をプリント（確認シート）で確認のミーティングを設定した。

〈ホームルーム活動〉

四字熟語やことわざの学習を通して、語彙の意味理解や適切な表現方法を学習した。

漢字の由来や季節にまつわる言葉等、漢字の豆知識の紹介を朝の会で2～4語程度行い、帰りの会で意味の確認を行った。

〈日誌指導（学級）〉

日誌の記述に対する誤字脱字を訂正した。

毎日の日記欄と併せて南風録を掲載し、漢字の読み2問、文章の要点への線引き、感想の記入を行うようにした。

〈就職試験面接対策時（学級）〉

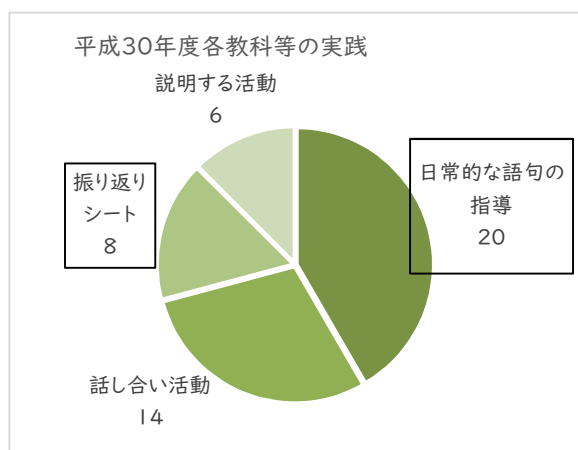
面接での受け答えを指導し、自己表現力を身に付けるようにした。

〈言葉遣い（環境工学・課題研究）〉

授業の開始・終わりの挨拶や会話での助言指導。

授業内容の確認を全員で発声して確認した。

指導者側も言葉遣いに留意して日々指導にあたった。



イ 生徒の変容

〈日常的な語句の指導〉

- 自己PR・自分のことについては適切に表現できるようになった。
- 漢字の読みに関して、同じ読みを複数回出題する中で、文章中でも読むことができるようになった。

- 学習した知識（単語、熟語、文法など）を活用することで幅広い表現を身に付けられると実感した。

△ 熟語や語句、敬語表現自体は習得しているが、状況や文中での使い分けられるまでには至っていない。

〈振り返りシート〉

- 振り返りのレポートを活用することで生徒同士の作業内容の確認及び注意し合う態度を育成した。指示以外の部分にも気付いて教師に報告できるようになった。
- レポート提出による報告や発表を行うことで、振り返りと次回への課題、改善点や工夫点を確認できている。
- 振り返りシートで用いられたキーワードが生徒側と教員側の評価の基準となるため、間違いに気付きやすい。
- 課題について、構想を立て実践し、評価・改善しながら考察を深め、仮説、実験、検証を繰り返しながら自らの考えや集団の考えを発展させることに繋がった。

〈話し合い活動〉

- 話し合い・発表の機会を設けることで、お互いを受容及び指導できる場となった。

ウ 初年度研究のまとめ

「振り返りシートの活用」と「日常的な語句の指導」の二つが言語活動の充実につながり、その言語活動の充実が思考力・判断力・表現力の育成に寄与していると考え。さらに、思考力・判断力・表現力の伸長が問題発見・解決能力の原動力となり、これらの力が進路実現及び友好的な人間関係の構築を促し、豊かな社会生活の営みにつながると考え、次年度の取組を以下のように設定した。

(2) 令和元年度の取組

ア 研究内容

言語活動の充実を育成するために、各教科・各学科の授業において「振り返りシート」を活用した授業の実践と、各学級において「日常的な語句指導」を行い、生徒の変容を通して指導の効果を明らかにする。各教科・各学科の授業における

「振り返りシートの活用」については、それぞれで書式は異なるが、毎時間・各単元など授業の形態によって活用する場面を調整して実施し、各学級における「日常的な語句指導」では、主にSHR(朝の会・帰りの会)での言語活動と日誌の指導を通して実践を行った。

イ 取組内容

共通教科においては、「振り返りシート」を活用して主に、語彙数の獲得と、表現する力(主に毎時間ごとの自分の理解度と、何が分かって何が分からなかったのか、難しかったのかを表現すること)、自分の意見や考えを相手に伝える力の育成を目指し、以下の取組により実践検証を行った。

- ・ ワークシートの活用(言語力、表現力)
- ・ 毎時間の目標を設定
- ・ 各単元・題材毎でキーワードの設定
- ・ 振り返りシートで自己反省、達成度の確認
- ・ ICT機器の活用(学習の見通し)

これらを基に、学習内容を理解し、自分の理解度が高まるように取り組んだ。

専門教科においては、「振り返りシート」を活用し、専門用語を理解する力や専門教科書の説明文の内容を正確に読み取る力、自分の学習した内容を振り返り、自分の言葉で表現し、伝えたり、説明したりする力、自分の能力に見合った課題が分かる力の育成を目指し、以下の方法により実践検証を行った。

- ・ ワークシートで学習目標、内容の確認
- ・ 振り返りシートで手立ての妥当性を確認
- ・ 発表する機会の設定(表現力の育成)
- ・ ICT活用による専門用語の理解向上

日常的な語句指導においては、各学級で語彙数の獲得、文章力や聞き手が分かるように伝える力、気持ちや考えの表出ができる力、自他を見つめる力を身に付けることをねらいとして、以下の取組により言語活動の充実を図った。

- ・ 学級日誌の活用(正しい文章力の育成)
- ・ 会話、作文における発音及び敬語指導
- ・ 熟語の活用(例文提示、就職試験対策)
- ・ 日常事象におけるものの見方、考え方

ウ 研究のまとめ

(ア) 成果(振り返りシート、日常的な語句指導)

- ・ 書き方やポイントをおさえた内容で記述の表現ができるようになってきた。
- ・ 今後の展望や目標について書くことができるようになり、見通しがもてるようになった。
- ・ レポートの振り返りで、具体的な内容でまとめることができた。
- ・ 生徒が自己評価を行うことで、生徒自身が学習内容の理解度を確認できるとともに、教師も理解度を確認することができた。
- ・ 感想文等において、以前は事実の羅列が多かったが、印象に残った一点についての記述の深まりが見られるようになった。
- ・ 自分の考えがまとまらない時に、伝えることを諦めてしまうことがあったが、自分の考えを表現する場を設けることで、自分の言葉で伝えようという様子が見られるようになった。

(イ) 課題

- ・ 授業冒頭で前時の振り返りシートを活用する時間の確保が必要だった。
- ・ 重複障害学級の振り返りシートの見直しが必要であった。

記入の方法									
A…できた(90~100%)		B…まあまあできた(60~89%)				C…まだ練習や時間が必要(30~59%)			
D…できなかった(0~29%)									
項目		／	／	／	／	／	／	／	／
バレーボールに興味をもって取り組むことができた。									
バレーボールを楽しく取り組むことができた。									
チームの友達と協力して取り組めた。									
話し合いの時に、自分の意見を言うことができた。									
審判の判定に従うことができた。									
安全に気をつけて取り組むことができた。									
公正な態度で取り組むことができた。									
自分の目標を意識して練習できた。									
自分の技能が上達するための方法を考えることができた。									
自分のポジションや役割を理解できた。									
自分のポジションや役割を理解し、その動きや技能ができた。									
チームの課題(目標)を意識して練習できた。									
チーム内でボールをつなぐ方法を考えることができた。									
自分の考えを伝えることができた。									
正確にオーバーハンドパスをすることができた。									
正確にアンダーハンドパスをすることができた。									
サーブを相手コートに入れることができた。									
サーブを相手コートのねらった所に入れることができた。									
正しいステップでスパイクができた。									
狙った場所に正確にトスを上げることができた。									
自分のエリアにきたボールを意識して処理することができた。									
バレーボールについて、知る事ができた。(ルール、コート、ボールなど)									
ゲームの流れを理解することができた。									

振り返りシート様式例(体育科)

新・デザインカルテ									
フリガナ		氏名		性別		年齢		学年	
ご住所		ご職業		ご電話		ご趣味		その他	
デザイン		サイド		バック		もみみ		その他	
カット		シャンプー		シェーブ		フェイシャル		その他	
マニサージ		プロセッサ		整髪料		その他		その他	
技術指向									
備考									
初回来店日									
担当者									

振り返りシート記録例（理容科）

(3) 令和2年度の取組

ア 研究内容

共通教科・専門教科において、「振り返りシート」の活用方法の見直しと実践検証，SHR(朝の会・帰りの会)での言語活動と日記指導の工夫について実践検証を行った。また，言語化のツールとしてICT機器を活用することで，生徒の思考力・判断力・表現力のさらなる向上を図った。

イ 取組内容

これまでの研究実践で，振り返りシートの記入の習慣化ができた。しかし，シート形式を生徒の実態に合わせることや，日常的な語句指導も含め，記入後の教師の働き掛けが不十分であった。そこで今年度は，取組の重点を以下の3点とした。

- ・ 生徒の実態に応じたシート形式の改善
- ・ 意欲喚起につながる教師コメントの工夫
- ・ ICT機器の活用

事項内容	冬野菜を育てる。火田の草取り
用具	草取りがき、二車輪車、軍手、ゴミ袋、タブレット
経過	今日は火田の草取りや冬野菜を育てる事をした。草取りは久しぶりで、たくさんあって大変だったけど、皆と協力してきれいになりました。私はすっきりになりました。 大変な仕事も、みんなで行えば、早く終わりはする。次は何をしようかと考えて、進んでいこうかな。もういいですね。
	9月15日 火曜日

ウ 研究のまとめ

(ア) 成果

- ・ 振り返りシートにある生徒の疑問を授業で取り扱うことで「知りたいことが分かる」授業づくりにつながった。
- ・ 絵や図を併用することで，表現意欲の高まりが見られた。また，事後指導で絵を見て説明をすることで，言語化を図ることもできた。
- ・ ICTの活用で話し合い活動や発表の場面で生徒が考えを言語化しやすくなった。

(イ) 課題

- ・ 単元毎の振り返りの場合に，タイミング（大単元終了時，小単元終了時など）によって振り返りの質に差が生じた。
- ・ ICT機器の使用場面に妥当性がないこともある。（他の方法と比較してその効果に有意差が認められないなど）

6 さいごに

この3か年で，さらなる思考力・判断力・表現力の育成・伸長，豊かな言語力・コミュニケーション力の育成を目指し，言語活動の充実に取り組んだ。

各教科等における振り返りシートの活用や各学級や部活動の日誌指導による，日常的に使用する語句の定着，文章表現力の向上を図ったことで，より具体的な効果が見られるようになった。生徒が表現したものに対する教師の働き掛け次第で，その取組によって得られる成果に大きな違いがあることも明確であり，高等部職員全体のコメント力を含めた指導力の向上が，生徒の高い表現力の獲得につながることを実感できた。

また，今年度の研究ではICT機器を活用した生徒の表現活動にも取り組んだ。必要な場面に必要な機器及び機能を選択し，活用することで生徒の実態を問わず「伝える」「共有する」活動の質が向上した。

各機器等の数的，質的な充実は課題であるが，効果的な場面にもピンポイントで使用することでメリハリのある学習活動の実現につながると考える。ICT機器を使用することを目的とするのではなく，その効果を精査する教職員の資質向上も求められている。

社会で他者と豊かに関わる力を育てる

鹿児島聾学校 寄宿舍

1 主題設定の理由

平成27年度から29年度までの3年間『コミュニケーション力を育む生活指導』のテーマのもと研究を行った。日常生活や話し合い活動を通して「聞く力」「話す力」「書く力」を育てる取組を行った。

その結果、一定の成果を得ることはできたがコミュニケーション力の向上をめざすうえで新たな課題も見つかった。

他者と関わる際に、基本的なコミュニケーション力を身につけることは不可欠であるが、それと同時に他者の心情を思いやったり、マナーを意識したりすることも必要である。社会の中で、他者との豊かな関わりを考えると、マナーや礼儀を身につけることが大切ではないかと考えた。

2 研究の目的

「社会で他者と豊かに関わる力を育てる」のテーマのもと『豊かに』関わるために必要な支援、指導のあり方について研究することにした。

3 研究仮説

(1) 一般的マナー班

卒業後の社会生活における具体的な場面を設定し、実際の社会生活をイメージしながら実践を重ねることで、マナーに対する意識が高まり寄宿舍生活にも反映されるのではないかと。

(2) 食事・入浴に関するマナー班

入浴と食事に関する場面の振り返り学習をすることで、マナーの必要性に気づき、自ら考えることで他者と豊かに関わる力が身につくのではないかと。

4 検証方法

(1) 職員を2グループに分け、グループ別研究を行う。

(一般的マナー班, 食事・入浴に関するマナー班)

(2) 毎週金曜日を研修日とし、グループ毎に研修の時間を持つ。

5 研究計画

年 度	主な内容
平成30年度	舎生の実態に応じた指導内容の検討 研修計画の検討
令和元年度	実態把握 指導実践（一般的マナー, 食事・入浴に関するマナー）
令和2年度	指導実践（一般的マナー, 食事・入浴に関するマナー） 研究成果について検証し、研究のまとめを行う

7 研究の内容及び実践

【一般的マナー班】

一般的マナー班では、大きく二つの柱に分け、生活音に関するマナー（全舎生対象）と一般的なマナー（高等部生対象）として取組を進めた。生活音に関するマナーは舎生の日常生活のなかから取り上げ、一般的なマナーは卒業後に必要とされる病院のかかり方を中心に自己解決方法も含めた実践に繋がるよう研修を深めた。

令和元年度

		内 容
一学期	4月	研究計画
	5月	歩き方、ドアの開閉
	6月	トイレの音
	7月	合図の仕方、夏休みにむけて、インターンシップをふり返って
二学期	8月	計画確認
	9月	一般的マナーの資料確認、掲示物の準備
	10月	調べ学習の発表
	11月	昼間と夜間のちがい
	12月	専門医・病院のかかり方、咳エチケット
三学期	1月	反省、まとめ
	2月	反省、まとめ
	3月	報告会（全体研修）、次年度に向けて

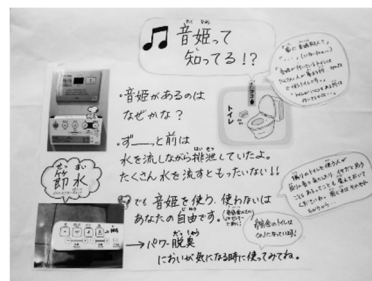
5月 「歩き方、ドアの開閉」

対象者	小・中・高
準 備	画用紙・色マジック
指導内容及び舎生の様子	テーマの内容に入る前に、まず「生活音」とは何かを押さえ、舎生が生活するなかで気になる生活音は何か、色画用紙に記入して話し合いを行った。 他の人に迷惑が掛かる、意識することが大切などの意見が出た。舎監の先生も話し合いに加わり、舎生も積極的に参加し、それぞれの経験を踏まえて考えを述べた。友達の話聞いて「へー」「そうなんだー」と新しいことを知り、改めて歩く音やドアの開閉時の動作など考えることができた様子。 マナーはみんなが気持ちよく過ごすために大切なことを伝えた。 小・中・高等部生が一緒に話し合いながら考えていくことで、小学部生も楽しく参加できた。



6月 「トイレの音」

対象者	小・中・高
準備	音姫の写真（センサー式・手動式），説明文
指導内容 及び 舎生の様子	トイレを使うときに気をつけたい音，音姫を知っているか等を，質問する。音姫（ボタン式）や脱臭ボタンを使う・使わないは，本人の判断だが，隣の人や次に使用する人が不快に感じる場合があることも含めて話をした。 ＊写真～寄宿舎の音姫，他の場所の写真を見せて，いろいろな工夫があることを確認した。 小・中・高等部生は，日常のなにげない生活音の内容だと感じていたが，各ボタンの確認などしっかり取り組めた。トイレの便座には，周りに配慮した機能があり，自分のこととして，トイレ使用時のマナーに活かせることに繋がった。

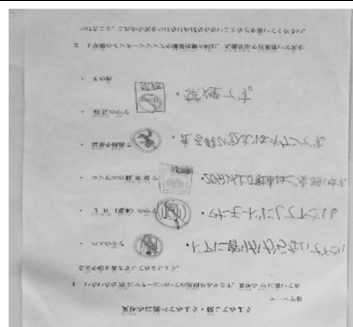


7月 「合図の仕方」「夏休みに向けて」「インターンシップを振り返って」

対象者	中・高
準備	プリント
指導内容 及び 舎生の様子	相手を呼び合うときにどのような方法を使っているか話し合った。 軽くテーブルをノックする，友達を介して知らせてもらうなどの方法を実際行った。テーブルに手を当てて振動の伝わり方や音の大きさを，それぞれが体験した。そして，それが場合によっては他人に迷惑をかけることがあることに気づくことができた。また，公共の場所ではどのようなマナーの呼びかけがあるか夏休み中に自宅で調べてくることにした。

10月 「調べ学習の発表」

対象者	中・高
準備	ホワイトボード，カード（絵と文章），マグネット
指導内容 及び 舎生の様子	夏休み中に，マナーの看板や絵や文を書き写してきたものを使い学習した。知らなかったもの，意味が理解できないものはカードを使用し，絵と説明文のマッチングやロールプレイを行って理解を深めた。身近にマナーに関する記載が多くあることを知り，興味を持ったようだった。



11月 「昼間と夜間の違い」

対象者	小・中・高
準 備	ホワイトボード, 色画用紙2枚(夜用に黒色・昼用に黄色), 音のカード(テレビ・掃除機・洗濯機等)
指導内容及び 舎生の様子	「生活音」とはどのような音か説明を行い, その中でも昼間と夜間の音の違いを質問した。テレビ・掃除機・洗濯機の3つの絵カードを示し, 特にこの中で音量を変えて使用できる物と変えられない物の使い方について考えた。その他, 自分で気づいていることを発表してもらう。 戸建てと集合住宅の違いなど生活環境の違いがあり, 周りへ配慮をする経験が少ない面が見られた。



12月 「専門医・病院のかかり方・咳エチケット」

対象者	高
準 備	専門医の絵カードと言葉(△△科)のカード
指導内容及び 舎生の様子	病院に行くときに必要な物について保険証・現金・お薬手帳等確認し, 次に専門医の絵カードと言葉(△△科)のカードを用いてホワイトボードに絵と言葉のカードを合わせて貼ってもらう。 咳や・くしゃみをしたときに飛沫が飛ぶ距離について, 3メートルのメジャーを使ってどのくらいの範囲に飛ぶか, 体験的に学んだ。限られた時間の中で, 集中して取り組めるようにカードやメジャーを使用した。実際に活動して学習できるような内容に今後も工夫していくとよいのではないかと。それぞれ迷いつつも, 絵と言葉のカードを合わせていき, よく理解することができた。



令和2年度

		内 容
一学期	4月	課題についての進め方の研修
	5月	内容の振り返り 掲示物の作成
	6月	問診票の書き方
	7月	
二学期	8月	反省・2学期以降の進め方の確認
	9月	病名と症状
	10月	
	11月	内容の振り返り
	12月	まとめ
三学期	1月	まとめ
	2月	まとめ
	3月	次年度に向けて

6月 「問診票の書き方」

対象者	高
準 備	内科問診票・ジェネリックについて（説明書）
指導内容 及び 舎生の様子	卒業後、一番利用する可能性の高い内科に限定して、実際に問診票の記入を試みた。質問内容を理解し、病状を正確に伝えるために必要な語彙力や経験が少ないことから記入できない項目が多かった。「発熱」「頭痛」などの言葉の意味の確認もできると理解が深まったのではないかな。 併せて今後、調剤薬局においてもスムーズな受け答えができるようにジェネリック医薬品についても説明をした。ジェネリックという言葉自体は知っていたが、安全性や価格の安さの理由は詳しく理解していなかった。説明をしたことで今まで曖昧だった部分が分かり安心した様子を見せていた。

9月 「病名と症状」

対象者	高
準 備	内科の病名カード・症状カード
指導内容 及び 舎生の様子	病名と症状の理解には不安があったためそれぞれのカードを準備して確認を行った。 嘔吐、吐き気、鼻水、鼻詰まり、痰等の症状が似ているものは難しそうだったが、お互いに助言し合い楽しそうに学習していた。 これから病院に行ったときは、自分で症状を言えるように、また問診票を書けるようになってほしいと伝えた。今後、言葉の理解が深まりスムーズな受け答えに繋がることが期待できる。



<成果>

- ・ 舎生に合わせた手作り教材等を準備して学習を進めた。興味・関心が高まり、楽しい雰囲気の中で子供たちの理解を深めることができた。
- ・ 寄宿舎生活の中の日課と現代社会における家庭生活は生活時間帯一つをとっても、違いが大きい。その違いのある環境のなかで周りへの配慮すべき点について改めて考える機会になった。
- ・ さらにコミュニケーション力が必要な場面として病院に関することについて取り組んだ。病院の種類、いろいろな病名や症状など子供たちの体験を踏まえながら学習した。特に問診票の内容を学んだことで病院や調剤薬局でのスムーズなコミュニケーションに繋がるのではないかと考える。

<課題>

- ・ 一般的なマナー班は、生活音に関することや卒業後に必要なことを中心に学習を進めた。そのなかでそれぞれの生活環境が異なるため、一人一人のマナーについての理解や意識の高まりに差が見られる。今までの学習の成果が舎生の変容として直ぐに見られるわけではないので、今後も継続して、ことばや知識の習得に取り組ながらマナーの向上を図る必要がある。

【食事・入浴マナー班】

(1) 内容及び実践

食事に関するマナーは、学習会と掲示による学習形式をとった。

入浴に関するマナーは、実態や指導内容に違いがあるため、男女別の学習会による学習形式をとった。

令和元年度

		食事に関するマナー	入浴に関するマナー
一学期	4月	基本的なマナー	
	5月	食事前の手洗い	実態把握アンケート集約
	6月	食器の並べ方	シャワーの使い方
	7月	あいさつの仕方	
二学期	8月	進捗状況と中間反省	
	9月	正しい姿勢・箸の使い方	
	10月		洗髪と身体の洗い方
	11月	テーブルマナー実践 外食時のマナー	
	12月		浴室でのマナー 髭剃りについて・生理時のマナー
三学期	1月		公衆浴場のマナー
	2月	反省・まとめ	
	3月	次年度に向けて	

令和2年度

		食事に関するマナー	入浴に関するマナー
一学期	4・5月	課題についての進め方の研修・内容の振り返り・掲示物の作成	
	6月	食器のあいさつ・食事のマナー	
	7月		髭剃りについて・生理時のマナー
二学期	8月	反省・2学期以降の進め方の確認	
	9月	食事指導内容の共通理解・実践	
	10月		幼稚部 お風呂に入る時に気をつけること
	11月	内容の振り返り	
	12月	まとめ	
三学期	1月	まとめ	
	2月	まとめ	
	3月	次年度に向けて	

ア 食事に関するマナー

令和元年度

取組項目	指導内容・舎生の様子
基本的なマナー	「食事のマナー」（手洗い、食器の並べ方・あいさつ・姿勢・箸の使い方・外食時のマナー）のイラストを掲示し、内容の確認と意識していることの把握を行った。 気をつけていることについては「箸の使い方」のみ意見がでた。
食事前の手洗い	下記参照
食器の並べ方	食器の並べ方の理由を説明し、絵カードを使用して実際に並べた。朝夕の食事時間に取り組んでいるため正しい並べ方ができている。
あいさつの仕方	夕食時、テレビ画面にあいさつの言葉を映し出し、合わせてあいさつをし、当番はみんなに伝わるよう声を出し手話もゆっくりするように指導した。 テレビ画面に映し出している期間は大きな声でゆっくり手話をしてあいさつをしていたが、次第に声が小さくなった。
正しい姿勢・箸の使い方	舎生の代表を交代でたて、実践形式で相互確認をした。 代表舎生をたてたことで興味を持ち、積極的に発言していた。 指導後しばらくは、学んだことを意識して食事をしていた。
テーブルマナー実践	食事に関するマナー学習のまとめとして「食事のマナー」の目標を立て、意識しながら誰とでも楽しく食事ができるよう取り組んだ。舎生は普段と異なる雰囲気の中なかで楽しく食事ができたが、マナーを意識するまでには至らなかった。
外食時のマナー	基本の食事のマナーを復習したうえで、店内の歩き方、ドリンクバーの利用について学習会を行った。 幼・小学部は正しい姿勢、箸の持ち方についての学習についてよく覚えていた。

《食事前の手洗い》

実践をふまえ、検証のため職員にアンケートを実施した。結果を受け、意見が多かった取組項目の詳細を掲載する。

舎生の実態	指先を水で数秒濡らすだけで手洗いを終わらせる舎生がいる。 爪、親指・手首の周り、指の間までしっかり洗う舎生は少ない。 勢いよく水を出して手を洗ったり、手を拭く前に洗面所で手を振ったりして水を切るため手洗い場に水が飛び散ることがある。 手洗い場の近くに台拭きがあるが、拭き上げる舎生は数人である。
指導内容	食堂の手洗い場（3カ所）に「てをきれいにあらってね（図1）」 「さあ やってみよう（手の洗い方）（図2）」「きれいになったね（汚

	れが残りやすいところ) (図3)」のイラストを掲示した。 ミーティングで「手洗い場が濡れたら拭くように」連絡する。
舎生の様子	掲示に気がつかない舎生もいた。 幼稚部生が掲示イラストを見ながら「きれいに洗っているよ」と言う。 洗い方に変化がみられない小学部生に対し、高等部生が「指先だけでなく手のひらも洗うように」と注意していた。 高等部生の中に水はねを拭く姿がみられるようになってきた。 一部の舎生が水はねを拭いている様子が定着してきた。

図1



図2

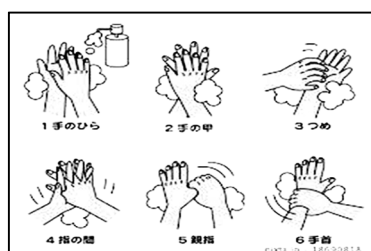


図3



令和2年度

食事のあいさつ	厨房の先生方にどのような思いで舎食を作っているかアンケートに記入していただき、結果をふきだし風にまとめて、調理中の様子(写真)を掲示した。 じっくり見入る様子があり、以前に比べ食器を片付けるときに感謝の気持ちを伝える姿がみられるようになった。
食事のマナー	良くない食事の様子の写真を掲示し、舎生にどの部分が良くないか考えて記入してもらい、身につけたいマナーを紹介した。 小学部生は特に興味をもってクイズ感覚で答えていたが、中・高等部生は興味がだんだん薄れていった。
食事指導内容の共通理解・実践	下記参照

《食事指導内容の共通理解・実践》

アンケートの結果を職員で回覧し、共通理解を図り指導した。食事マナーの総まとめとして実践した後学習会を行った。

舎生の実態	手洗いの掲示イラストや、新型コロナウイルス感染症の影響もあり手洗い・うがいは徹底されていた。 朝夕の食事時間のなかで正しい食器の並べ方ができている。 あいさつの内容をモニターに表示すると大きな声であいさつがで
-------	---

	きていたが、次第に声が小さくなっている。 指導直後は、正しい姿勢や箸の使い方で食事をするようになったが、しばらくすると職員が声かけする場面が増えた。 食器を片付ける際に厨房の先生方に感謝の気持ちを伝える姿がみられる舎生もいたが、以前と変わらずあいさつをしない舎生もいる。 小学部生は、お互い良くないマナーの舎生に声をかけ合っている姿があったが、中・高等部生は、お茶の入れ方など改善がみられない。
指導内容	今までの食事マナーの振り返りについて、職員へ舎生の食事マナーで「良くなったところ」「もっと良くなってほしいところ」のアンケートをとり集計した。 共通の指導項目を挙げ強化月間を設けて、職員で共通理解し、指導した。 アンケート結果の「良くなったところ」①～⑤、「もっと良くなってほしいところ」①～③を隠し、何が挙げられているかクイズを行って、舎生自身に自分のマナーのあり方を考えられるようにした。 水はねを拭くこと、あいさつについてはラミネートの掲示を舎生の目にとまりやすい舎食献立表の隣に掲示した。 それぞれ自分達の振り返りを行うよう声かけをした。
アンケート結果 (複数回答可)	○ <u>良くなったところ</u> ①手洗い、手指消毒ができています。(10人) ②食器の並べ方(6人) ③箸の使い方(4人) ④食器の持ち方(3人) ⑤あいさつ(3人) ⑥コロナ対応もあり、食事のおしゃべりが少なくなった。 ⑦全体的に良くなってきている。 ⑧途中で席を立つ際や食器を片付ける際、マスクをしている。 △ <u>もっと良くなってほしいところ</u> ①手洗い場が水浸しになっている(6人) ②あいさつ(4人) ③食事の姿勢(3人) ④やかん(きゅうす)の持ち方(2人) ⑤手洗いの仕方。
学習会での舎生の様子	小学部 積極的に発表していた。 「良くなったところ」「もっと良くなってほしいところ」どちらにも「あいさつ」が出てきたのはなぜだろう？と気づき、考えて発表していた。

	学習会後は、手洗い場の水はねを進んで拭いていた。 感謝の気持ちが大切であるということに気づき、「ごちそうさま」と厨房の先生に伝えることができていた。 中・高等部 男女ともに「良くなってきたところはない」と自己評価は低かった。 良いところ、できていないところをお互いに確認しあう様子がみられた。自分自身だけでなく、お互いの姿を振り返ることができた。 手洗い場を拭くことについては「水浸しになっていても気にならない」「拭くことは決まりじゃない」と言う舎生がいた。その舎生に対し「私は嫌だな…」と意見を伝える舎生がおり、その舎生は驚いた表情であった。様々な考え方、思いを知る機会となったようである。
--	---

イ 入浴に関するマナー

令和元年度

取組項目	指導内容・舎生の様子
実態把握 「入浴のマナーとは」のアンケート集約	アンケート結果を提示し、それぞれの意見を知った。(小男子) 身体を清潔にすることに対する意識は高い。集団生活におけるマナーとして「時間を守る」の意見が多数あった。(中・高男子) 掲示物を見て、自分ができることがわかる。(幼女子) マナーについて知っていることをランキングで発表する。浴室内でのマナーはよく意識していた。(小・中・高女子)
シャワーの使い方	マナーの前にまず基本的な手順を確認し、泡の流し残しやシャワーの飛び散り方など、鏡を見ながら確認した。(小男子) 周囲への気遣い、配慮すべき点を意識させた。(中・高男子) 幼稚部生は小学部生を見習い、お互いよい緊張感があった。(幼・小女子) すでに知っていることは興味がないようだった。(中・高女子)
洗髪と身体の洗い方	職員の介助がなくてもできるように、個人目標をたて意識を高めた。(小男子) 学習会という形式にこだわらず、クイズ形式をとることで、短時間で実施できた。舎生もゲーム感覚で楽しんで参加していた。 事後指導として資料を掲示することで興味を示していた。(中・高男子) イラストを使いクイズ形式で行った。ぬいぐるみを使い、洗う部分を確認し、それぞれがお手本を示すことで興味を示していた。(小・中・高女子)
浴室でのマナー	舎生の気をつけたいマナーを職員が再現し、写真を撮った。写真を見て自分たちの行動を振り返ることができた。マナーについてどうし

	たらよいのか気づき、教えあう様子にもつながった。
中・高・男子 髭剃りについて	なぜ髭を剃るかを話し、剃り方のポイントを伝えることで、その後意識して剃る様子がみられた。 舎生の実態に合わせて今後も引き続き指導が必要と考える。
小・中・高女子 生理時のマナー	下着をかくす事は理解していてもナプキンを見えないようにする必要性を感じていない舎生がほとんどだった。 学習会后、入浴時使用した椅子は石けんで洗って片付ける事を知り、定着してきた。
公衆浴場の マナー	視覚的教材を活用し、気をつけていることを男女で分かれて話し合い意見を出し合った。イメージがわきやすく、いろいろと意見が出ていた。「かけ湯」の言葉や作法を知らない舎生も多く興味深く聞いていた。公衆浴場を経験したことがない舎生はイメージがわかない様子だった。

令和2年度

中・高・男子 髭剃りについて	前年度学習した舎生も、繰り返し伝えることで定着につながると考えられるので、継続した指導が必要である。 学習会で中学部生に対し高等部生が剃り方を教える場面も見られ、中学部生がとても集中して学んでいる様子があった。
中女子 生理時のマナー	学習内容が多いため、参考資料を準備したが、短時間でまとめることが難しかった。基本的なことはわかっているが、行動にはつながらない。
幼稚部 お風呂に入る時 に気をつけること	入浴前に衣類を脱ぐ順番の事前学習をし、浴室で実践した。 学習会以前より脱衣所に脱ぐ順番のイラストを掲示し、毎日繰り返すことで少しずつ身についてきている。 幼稚部生に理解しやすい掲示物を作成し、時間をかけて話をする必要があった。（男子） 入浴前にすることや、身体の洗い方（順番）を事前学習し、浴室で実践した。入浴後、身体の洗い方のパズルを楽しく学習した。（女子）

《生理時のマナー》

令和元年度、掲示や学習会を行った中で生理時のマナーについては、内容を深め繰り返し伝えていきたいとの思いから、再度学習会を行うことにした。

対象者	中学部女子
舎生の実態	脱衣所でナプキンを見えるところに置いていることがある。 パーテーションを使用せずにナプキンを付け替えることがある。

	浴室に経血が残っていることに気づかない場合がある。
指導内容	使用した椅子は石けんで洗い片付ける事が定着しているところをほめて、昨年度の学習会の振り返りを行った。(図1) ナプキンを変える時に汚れやすいところ、汚したときの対処法を伝える。 血液の怖さ(人の血液を触るのは危険)など次の人が気持ちよく使えるように使用した人が洗う必要性を指導した。(図2) プライベートゾーンの洗い方について、プライベートゾーンをきれいにしているのがマナーであることを指導した。
舎生の様子	新型コロナウイルス感染症対策のためソーシャルディスタンスをとり、舎生同士で話し合っている場面が設定できなかった。 質問をして考えさせるように意識したが、一方的な説明の方が多く資料を見ながら聞いていた。
学習会後の様子	ナプキンの扱い方やパーテーションの使用については、昨年度1回の学習会ですぐには改善がみられなかったため、その都度継続した指導の必要性を感じた。 先輩の姿を見て真似する姿がある。今年度は少しずつできるようになってきた。

図1

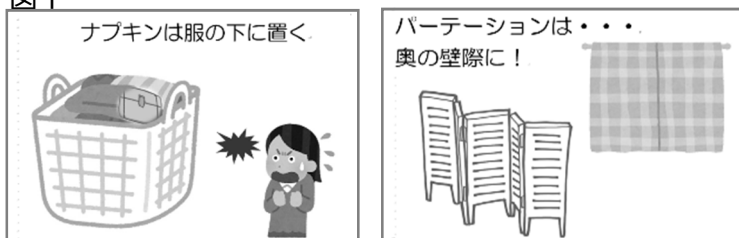
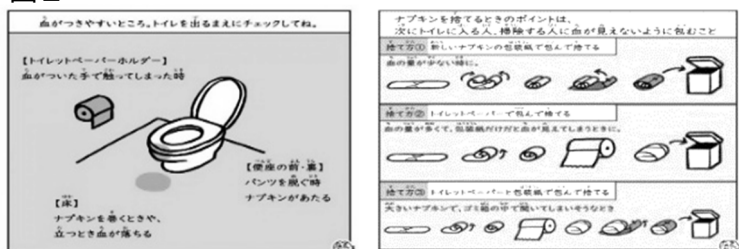


図2



「お風呂に入る時に気をつけること」

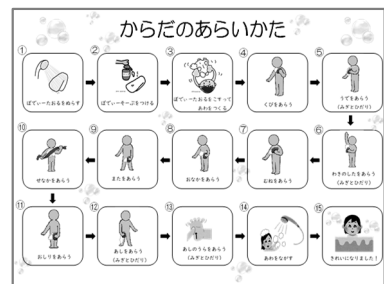
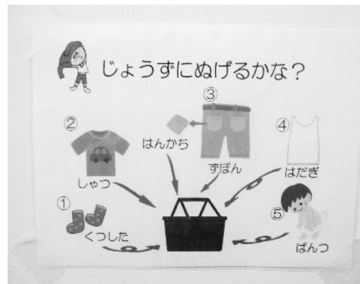
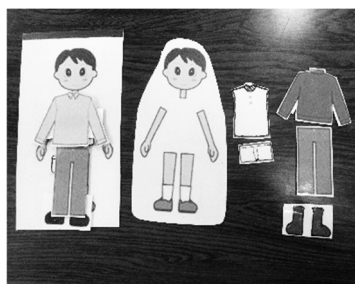
幼稚部生はマナーを身につけさせるためにまず服の脱ぎ方、体の洗い方など基本的な手順を確認し、事前学習を行った後、入浴時に実践し、事後指導を行った。

対象者	幼稚部生
舎生の実態	入舎して日も浅く経験が少ない。 語彙数も少なく理解度にも差がある。 理解することに時間を要する。(日々の生活の中で指導が必要) 模倣はよくできる。
指導内容	<男子>着脱人形を使用して普段していることを聞く。(図1) 掲示用ポスターを見ながら順番の確認をする。(図2) 毎日の入浴時に繰り返し指導する。 <女子>お風呂に入る時に気をつけること 「準備をしっかりする・トイレに行く・服をぬぐ順番」 「なぜそうするか」理由を考える時間を持つ。 体の洗い方・流し方・ふき方の基本的な手順を確認する。 体の洗い方のパズルを行う。(図3)
舎生の様子	<男子>着脱人形に興味を持つ。 ポスターを活用し確認したことでイメージできた様子があった。 <女子>脱いだ下着を見えないようにかごに入れるのはなぜか尋ねられ「恥ずかしいから」と答えた。 体の洗い方は掲示物を見ながら確認していた。 パズルは遊び感覚で楽しんでいた。
学習会後の様子	洗い方の順番は自分でも絵を描き「お母さんに見せる」と言っていた。 掲示物はよく見ていて事後指導にも効果的である。

図 1

図 2

図 3



(2) 成果と課題

マナーの必要性に気づき、自ら考えることで他者と豊かに関わる力が身につくのではないかという仮説を基に成果と課題について考えた。

ア 成果

- ・ 掲示物は内容の工夫と「何がどこに掲示されているのか」を掲示前に伝えることは興味関心を持たせることに効果的であった。

- ・ イラストや職員の写真の活用は、実践に向けてのイメージにもつながった。
- ・ 職員にアンケートをとることで、どのようなねらいをもって指導を行うべきか共通認識できる機会となった。
- ・ 学習会の時間確保が課題であったが、資料の工夫やクイズ形式での実施などにより、学習会という形式にとらわれず、効率的に学習することができた。
- ・ 幼稚部・小学生部生は、学習会で使用した資料を脱衣所などに掲示したことで、言葉かけをしなくても自ら確認して実践する様子がみられた。
- ・ 生理時のマナーの学習会後から、使用した椅子は石けんで洗って片付けることが定着してきている。髭剃りについては、学習することで身だしなみを意識するようになってきた。
- ・ マナーの背景や、なぜそうした方が良いのか、何のためにするのか、という根拠を併せて説明すると意識的に学ぼうとする姿がみられた。

イ 課題

- ・ 小学部生は、興味関心を持つが、その場だけで定着に至らない。日常生活の中でも繰り返し指導を行うことが必要である。
- ・ 中・高等部生は、基本的な内容では積極性が低下するため、下級生にお手本を見せる、意見交換をするなどの工夫が必要である。
- ・ 髭剃りと生理時のマナーについては、得られた知識を行動にうつせるように毎年学習する場を持ちたい。
- ・ それぞれのマナーに対する認識に差があることがわかった。マナー（思いやり）とルール（決まり）の違いについては日常生活のなかで理解を深め、繰り返し学習していく必要がある。

8 まとめ

「社会で他者と豊かに関わる力を育てる」というテーマのもと、基本的な生活面からの取組に重点を置き研究・実践を進めてきた。日常生活の中でより良いコミュニケーションを取るためには、今後習得していくべきマナーの理解と語彙力の向上は欠かせない。また、周りの人の思いや相手の立場に立って考えることの大切さも留意しながら学習会を展開した。この学習を踏まえて、対人関係において少しずつ自信を持ち、コミュニケーション力の向上へ繋がったのではないかと思う。

今後も一人一人が社会で生き生きと活躍できることを願い子供たちのより良い成長を支援していきたい。